

学習会 (子ども会) だより 8月号 合併編
 MY SKY 第8号
 マイ スカイ
 1995年8月21日月曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者
 板野中学校
 学習会
 編集・文責:吉成正士

毎日暑いですね。暑さにへばっていませんか?へばる原因はいろいろあります。急激な^{きゅうげき}気温の変化もそのひとつですね。つまり、冷たい飲み物の取りすぎやクーラーのあたりすぎは、体調を崩す^{くず}もとになります。気をつけてくださいね。

ところで、夏休みも残すところ後わずかとなりました。もうそろそろ毎日の生活をもとに戻し、2学期に備えておきましょう。(夏休みの課題もお忘れなく!)

みんなの元気な姿が見られることを楽しみにしています!



◎なんしに先生^{せんせい}になったんな!(7月21日:徳島県部落解放高校生奨学生集会・郷土文化会館にて)

みなさんが夏休みに入った日、徳島市内にある郷土文化会館で県の解放奨学生集会(これは「県」と呼びます)が行われました。

「部落差別を解消していくためには教育が必要だ」という考えのもと、部落解放を自ら実践^{じっせん}していく人間を育成することを目標に、解放奨学金という制度^{せいど}が設けられました。これも解放運動^{せいど}の成果の一つです。もしこの解放奨学金がなければ、今のように差別解消は実現^{じつげん}してなかったと思います。それを考えると、たいへん画期的^{かっきてき}な制度だということが分かりますね。

ところで、この県奨に板中からも何名か参加していました。しかし本来は高校生の会なので、発言もできるだけひかえるという形での参加になりました。

それでも、高校生の仲間のパワーは十分に感じる事ができたと思います。同じ徳島県内にもこれだけ多くの仲間がいたのかと驚いた^{おどろ}のではないのでしょうか。そんな中、私はこんなことを考えていました。

『こういう会の「中学生版」があれば、高校での盛り上がりもさらに大きなものになる!』

実際、この集会に来て、初めて自分の中に意識^{いし}が芽ばえたという高校生が毎年たくさんいます。

昨年の県奨の時「初めて人前^{ひとまえ}で発表します……」とたどたどしく発表していた彼が今年も来ていました。彼もこの県奨で芽ばえた一人でした。その彼が、この1年間自分にでき

ることを自らに問い続けてきた思いを吐き出すように発言しました。内容は、高校の同和教育に対する不満です。それは、イコール「教師に対する不満」でした。

「ほんまに『なんしに先生になったんな!』って思うんよ」

「嘆いても、愚痴を言ってもどうにもならないことは分かって言よんやけど……」

「これからも言い続けていだけやと思ってます」

これらの言葉を「一つの特別な本音」ではなく「言いにくかった誰もが持っている本音」として、学校にいる教職員は本当に謙虚に受けとめなければならないと思います。と同時に、彼には、是非とも倒れることなく頑張ってもらいたいと願います。そして、一人だけで頑張るのではなく、一人ひとり仲間を増やしていきながら、より多くの仲間と連帯していく取り組みになることを切に願います。

みなさん、明日の県奨の盛り上がりをより確かなものにするために、今の中学校の学習を本当に大切にしておきましょう!



◎先生、実はオレそうなんですよ (7月22日：私の部屋にて)

その電話は、突然夜の10時頃かかってきました。

電話の相手と初めて出会ったのは、かれこれ6年も前になるのでしょうか。まだその頃、彼は高校3年生でした。高校を卒業してからも縁があり、まわりの友達と一緒に遊ぶことも年に2~3回ありました。その彼も、今春県外の大学を卒業し、徳島県内の福祉施設に就職しているのだそうです。

彼：「先生、うちの子いつも暇そうにしとるけん、中学生連れてきてくださいよ」

私：「そうやなあ。声かけたら行く子おるかもしれんなあ」

彼：「板中、同和教育盛んっていうし」

私：「どしたん、よう知とるで」

彼：「オレ、先生の文も読んだんですよ」

私の方がびっくりしました。学校関係以外の友人には、まだまだ部落問題についての話はできていません。それなのに、相手の方から「知っている」と言われるのですから……。

どうして知ったかという、卒業した高校に行き、先生と話していると「峠を越えて」や「いしづえ」の話になったのだそうです。ペラペラと見ているうちに、目に飛び込んできたのが、私の名前だったのだそうです。

それからは、部落問題についての話に終始しゅうししました。

しばらくして、彼は私の話を避さるさるように間まをおき、こう言いました。

「……先生……実はオレそうなんですよ」

ハッとしました。と同時に、私は彼との今までの距離が一瞬いっしゅんのうちに縮ちぢまったような気がしました。妙な話みょうなですが、すごく嬉うれしかったのです。それからなお一層話いっそうは盛り上もがっていきました。挙げ句あの果はてには

彼：「先生、今から家に行ってもいいですか？」

私：「ほらいいわ！」

ジュースやビールを手にして彼がうちを訪ねてきたのは、11時半くらいでした。朝の3時くらいまで話したでしょうか。

明るる日に県総体の1回戦がひかえていましたが、眠気ねむけよりもむしろ、充実感じゅうじつかんと感動かんとくで胸をいっぱいにした朝わかを迎えることができました。

みなさん！部落問題について誰とでも話ができるということは本当にいいものですよ。いつもいつもうまく話が進んでいくとは限りません。「何でわからんのな！」と思うこともあると思います。けど、たった1個のダイヤモンドげんせきの原石を見つけれられた喜びがあれば、何度でもトライできるように思います。相手に、限りなく近づいていけることが、喜びの一つなのですから！



◇◇◇ これからの日程 ◇◇◇

残りのこり少なくなった夏休み……名残なごり惜おしい……けど、終わればそこには2学期……ちよつとだけ待どち遠とほしい……かな？！

特に2学期は行事が目白めじろ押し！目が回らないように、しっかりしましよな！そして、たくさんたくさんの行事を無駄むだにしないように、せっかくですから学級づくりに役立ててください！

★8月22日(火)・23日(水) 3年生・夏休みの学習会(郡頭教育集会所 1:30~4:00)

☆9月16日(土)・17(日) 板中祭(体育祭・文化祭)

★9月28日(木) 1年B組1年全体学習

☆9月30日(土)~10月3日(火) 2年生修学旅行

部落ぶらくの起おこりとその歴史れきし 第5話「華はなやかな時代じだいのかけで」

前回、1600年代後半から1700年代にかけて形かたちづくられていった非人ひにん身分みぶんのことにつ

いてお話ししましたが、今回もちょうどその頃のことをお話したいと思います。

1600年代後半から1700年代前半にかけては、元禄^{げんろく}、享保^{きやうほう}期と呼ばれ、それまでの米^{こめ}経済^{けいざい}から貨幣^{かへい}経済^{けいざい}へと変わっていった頃でした。また都市^{むんし}は繁栄^{はんえい}し、元禄^{げんろく}文化^{ぶんか}が真^まっ盛り^{さか}の頃でした。

村^{むら}のよろず屋^やに出かけると、農具^{にちようひん}や日用品^{にちようひん}は手^てに入りましたし、若者^{わかもめ}目^め当て^あの鬢^{びん}つけ^{つけ}油^{あぶら}やおしゃれな品^{しな}も出まわっていました。少し前^{まへ}まではとても考え^{かんが}られないよう^{よう}な変化^{へんげん}です。

つまり、小さな村^{むら}にまで貨幣^{かへい}経済^{けいざい}が入り込^こんできたのです。ですから、農民^{にんぬい}は「錢^{ぜに}になる農業^{のうぎょう}」を考え^{かんが}ざるを得^えませんでした。

そんな時代^{じだいはい}背景^{けいけい}の中で、徳島藩^{とくしまはん}では藍作^{あいさく}が急^{きゆう}速^{そく}に発展^{はつてん}していきます。1700年代^{だい}の中頃^{ちゆうこん}には、吉野川^{よしのがわ}流域^{りゅういき}が藍作^{あいさく}一^{いつ}色^{しよく}にぬりつぶされたほどでした。

ところが、藍作^{あいさく}が盛^{さか}んになればなるほど藍作^{あいさく}農民^{にんぬい}の生活^{くわつ}は逆^{さか}に苦^{くる}しくなっていきました。「藍師^{あいし}」と呼ばれる、藍作^{あいさく}農民^{にんぬい}のまとめ役^{まとめやく}に支配^{しはい}されるようになっていったからです。藍作^{あいさく}をするために必要^{ひつよう}なお金^{かね}を、農民^{にんぬい}に高^{たか}い利息^{りそく}で貸^かしていたのです。中^{ちゆう}には借^{しゃ}金^{かきん}が支^し払^{はら}えずに、大切^{たいせつ}な土地^{ちゆう}を藍師^{あいし}に手^て放^{はな}し、小作^{こさく}人^{にん}や日雇^{ひやと}いになった者^{もの}もいます。

一方^{いつぱう}、大切^{たいせつ}な土地^{ちゆう}を次々^{つぎつぎ}と手^てにしていった藍師^{あいし}は、地主^{ぢぬし}という立場^{たてま}に変わっていきましました。つまり、村^{むら}の中に藍師^{あいし}を中心^{ちゆうしん}とする一部^{いぶ}の裕福^{ゆうふく}な農民^{にんぬい}と、その反対^{さかひ}に多く^{おほく}の貧^{ひん}しい農民^{にんぬい}ができていったのです。

しかし、藩^{はん}にとってそれらの傾向^{けいこう}は、好^{この}ましくないことでした。年貢^{ねんぐ}としての米^{こめ}が集^あまらない上に、有力^{りきき}藍師^{あいし}が多くの利益^{りえき}を独^{ひと}り占^じめにしていたからです。

それらをさせないために、藩^{はん}が行^{おこな}ったことについて、これから少しだけお話^{お話し}したいと思います。

享保^{きやうほう}18年(1733年)、藩^{はん}は藍^{あい}から生まれる利益^{りえき}を吸^{きゆう}取^{しゆう}するために、藍方^{あいかた}奉行^{おぎやうしよ}所^{しよ}という役所^{やくしよ}を新設^{しんせつ}しました。また宝暦^{ほうれき}4年(1754年)には「玉師^{たまし}株^{かぶ}」という言葉^{ことば}で藩^{はん}が藍師^{あいし}を指定^{ししてい}し、多額^{たがく}の税金^{ぜいきん}を取り立てようとした。これらのしわ寄せ^よは、当然^{たうぜん}農民^{にんぬい}へと移^{うつ}されることとなります。

宝暦^{ほうれき}6年(1756年)、藍作^{あいさく}地帯^{ちたい}の農民^{にんぬい}に、1枚^{まい}の紙^しが密^{ひそ}かに回^{まわ}されました。藍作^{あいさく}農民^{にんぬい}に対して一揆^{いっかい}に立ち上^たがるよう求め^{もとめ}た文^{ぶん}です。農民^{にんぬい}たちは計画^{けいかく}通り各地^{あち}で立ち上^たがり「藍作^{あいさく}税^{ぜい}」と「玉師^{たまし}株^{かぶ}」の廃止^{はいし}を訴^{うた}える気勢^{きせい}をあげました。

しかし藩も一揆を押さえるために必死でした。そして京右衛門をはじめ、一揆の指導者が逮捕されたのは、それからしばらくしてからのことでした。藍作農民が鮎喰川に集会し、城下に押し出そうという計画は決行直前について崩れてしまったのです。

一方、京右衛門たちは牢につながれ、毎日のように拷問に責められてきました。そして結果的に、藩の決まりを破り世間を騒がせた責任により、京右衛門を含めた5名が死罪を言い渡されたのです。

そんなとき刑の執行に命じられたのが、部落の人々でした。部落の人々にとっても藍作農民の苦しさは十分に理解できていました。農民も部落の人々も、封建社会の中で苦しむ同じ仲間だからです。

処刑当日の様子について、こういう記録が残っています。

「この日晴天、正午の刻夜とも昼とも分ちがたく、朧月夜のごとくなり。

この時藍圖百姓数万人寄り来たり、愁嘆す」

藍作農民にとって京右衛門たちは自分の命をかけて闘ってくれた大恩人でした。多くの人々が嘆き悲しんで、刑場に集まってきました。その中で、部落の人々は刑の執行にあたらされたのです。5人の遺骸は、しばらく見せしめとしてさらされました。その警護も、部落の人々でした。

もし、ひどい仕打ちに対する憎しみが部落の人たちへとすり替えられたとしたらどうでしょうか。この出来事で、部落の人々に対するミゾは決定的に深まり、風当たりは一段と強まったに違いありません。

確かに多くの犠牲を払い、藍作税と玉師株は廃止になりました。しかし、民衆をバラバラにして支配するという藩のねらいは、紛れもなく貫かれ、この後の政治に都合よく利用されていったのです。

華やかそうに見える文化も、それは表面だけのことで、その裏には悲しい現実があったのです。

「やさしい阿波の部落史」より改編